2012/12/30

示方書改訂小委員会

示方書2012年版の書式について

「枠囲みの条文」

* 編のタイトルは，印刷所が作成する中扉に記載されるので原稿では記載しなくてよい．ただし，ヘッダーには示す．
* 章や条文のタイトルが3文字以下の場合の文字間スペースは，タイトルの全長が4文字分となるようにする．具体的には，2文字の場合は文字間に2文字分のスペースを空け，3文字の場合は文字間に半角スペースを空け，「総　　則」，「安 全 性」のようにする．
* 章の始まりでは改ページをし，新しいページから書き始める．節の始まりでは改ページをせずに，前の節の最終行から1行空けて書き始める．
* 章のタイトルは「**1章　総　　則**」などと，14ptの太字で，数字は半角のTimes New Roman（これまでは明朝であったが今回から変更），日本語は明朝とする．数字から書き始め，「第1章　総　　　則」などとはしない（「第」は付けない）．なお，章のタイトルの前には18ptで2.5行，後には18ptで0.5行の間隔を空ける．
* 条文のタイトルは「1.1　一　　般」などと，すべてを10.5ptのゴッシクとし，太字にはしない．条文のタイトルの前には18ptで1行，後には18ptで0.5行の間隔を空ける（章タイトルと条文タイトルの間は，章タイトル後の0.5行と条文タイトル前の1行の合計で1.5行の間隔を空ける）．
* 条文の段落番号は，「（１）」や「（２）」などとし，カッコは明朝，中の数字は全角ゴシックとする．
* 条文で段落番号以外の項目番号を使う場合には，「（i）」や「（ii）」などを使うとよい．カッコは明朝，中の数字はTimes New Romanとし，ゴシックにしない．
* 条文の最終行と枠囲みの下の線の間には18ptで0.5行の間隔を空ける．
* 枠囲みが複数ページに及ぶ場合には，ページ間の横線は削除する．作業としては，二つの枠囲み（セル）に分けて，「線種とページ罫線と網掛けの設定」から不要な横線を消す．

「解説文」

* 解説文の第1行と枠囲みの下の線の間には，18ptで0.5行の間隔を空ける．
* 解説の書き出しは，「【解　説】　コンクリートは」などとする．【解　説】はゴシックとし，太文字とはしない．【解　説】の後は1文字分の空白を空ける．
* 条文が複数の段落から構成されている場合には，それと対応させて，「（１）について　コンクリートは」，「（１）および（２）について　コンクリートは」，「（１），（２）および（３）について　コンクリートは」などとする．
* 解説文では原則として①②③などの段落番号をつけない．
* 解説文で段落番号以外の項目番号を使う場合には，「（i），（ii）」などを使うとよい．この場合にはゴシックにしない．

「文章のフォント」

* 文章中の英数文字は，半角のTimes New Romanとする（以前は，本文では，単体（一文字）だと全角，複数桁だと半角を基本としていたが，今回から変更）．ただし，条文や解説における段落数字は例外．また，今回の改訂では，可能な範囲で対応することとし，編ごとに統一されていればよい．
* 単位は半角のTimes New Romanとする．
* 不等号は「≤（下線1本，半角）」で統一する（不等号は，左を小とするのが基本）．本文中であれば，「記号と特殊文字」―「挿入」でフォントをSymbolとすることで入力できる．「≦（下線2本，全角）」は使用しない．
* 文章中で各編を引用する場合には，［設計編］［設計編：本編］［設計編：標準］などとし，引用先のフォントに合わせて，全角明朝を用いる．［　］の中に入れるのは，本編・標準のレベルまでとする．
* 文章中に他の章を引用する場合には，「これは5章に示された」「これは，［設計編：本編］5章に示された」などとし，引用先のフォントに合わせて，数字は半角のTimes New Roman（従来の全角明朝から変更），その他は全角明朝を用いる．
* 文章中に図表番号を引用する場合には，「これは解説 表8.2.2に示された」などとし，引用先のフォントに合わせてゴシックを用いる．フォントサイズは本文と同じ10ptとする．
* 文章中に式を引用する場合には，「これは式（解1.2.3）によって」，「これは式（1.2.3），（1.2.4）によって」，「これは式（1.2.3）～（1.2.4）によって」などとし，引用先のフォントに合わせて，数字は半角のTimes New Roman（従来の半角明朝から変更），その他は全角明朝を用いる．なお，複数の式を引用する場合には，2つ目以降では「式」を略す．フォントサイズは本文と同じ10ptとする．

「式」

* 式は3（～5）文字程度字下げして書き出す．複数の式が並ぶ場合にはインデントをそろえる．
* 式番号は右寄せする．
* 記号の説明は，「ここに，」で書きだす．「ここに，」の左のインデント幅は1字とし，その行から記号の説明を開始する．記号の説明の「：」を縦にそろえる．
* 以下に，条文および解説文における例を示す．

|  |
| --- |
| 支圧強度　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 （5.2.3）ただし，ここに， ：コンクリート面の支圧分布面積　　　　：支圧を受ける面積 |

　　　*θmp*＝(0.021*kw*0･*pw*+0.013)/(0.79･*pt*+0.153) （解 7.2.8）

　ただし，0.021*kw*0･*pw*+0.013≤0.04，0.79･*pt*+0.153≥0.78

　　　*Lp* = 0.5*d* + 0.05*La* （解 7.2.9）

　ここに，*δm*0 ：最大耐荷力点の躯体部分の変位

*δmb*：塑性ヒンジ部以外の曲げ変形による変位

*pw*：帯鉄筋比（%）

「図」

* 解説中の図のタイトルでは，「解説 図1.2.3　タイトル」のように9ptのゴシックとし，「解説」と「図」の間に半角スペースを入れる．なお，ハイフンは入れない．
* 2007年版の原図は出版社にある．2007年版の示方書の図が鮮明であれば，原稿の図が不鮮明であっても問題ない．朱書きで差し替えの指示をすること．
* 2007年版の図を修正して使用する場合には，修正内容を朱書きする．出版社において修正対応する．

「表」

* 両端の縦線は削除する
* 一番上の横線のみ，1ptと太線にする． 他の線は0.25pt．
* 解説中の表のタイトルでは，「解説 表1.2.3　タイトル」と9ptのゴシックにし，「解説」と「表」の間に半角スペースを入れる．なお，ハイフンは入れない．
* 表の中の文字のフォントは8ptを基本とする．

解説 表1.4.1　文末表現の標準

|  |  |
| --- | --- |
| 末尾の字句 | 条文の取り扱い |
| ･･･とする．･･･しなければならない． | 実際上の明確な根拠に基づく規定，あるいは規格や取り扱いを統一する必要性から設けた規定であり，明確な理由が無い限り当該規定に従わなければならない．　なお，「･･･するものとする」「･･･によるものとする」「･･･とおりとする」も同様である． |
| ･･･原則とする．･･･標準とする． | 条件によって一律に規制することはできないが，実用上の必要性から設けた規定であり，趣旨を逸脱しない範囲であれば，必ずしも当該規定に従わなくてもよい． |
| ･･･するのがよい．･･･することが望ましい． | 特に大きな支障がない限り規定どおり実施してほしいが，現地条件や簡素化の観点等で，そこまで厳重に規制する必要はないと思われる規定． |
| ･･･してもよい．･･･することができる． | ものごとの実施にあたり，簡単にすることを旨とする場合に便宜上の簡便法を与えた規定であり，厳密な検討を行う場合には当該規定によらなくてよい．　あるいは，規定が安全側に作られているための緩和規定であり，当該規定の適用が不合理と判断できる場合には，これによらなくてもよい． |

「表現方法」

* 法人は名称のみを記載して，簡略化する．たとえば，「日本コンクリート工学会」は，「（公社）日本コンクリート工学会」や「公益社団法人日本コンクリート工学会」などとしない．なお，「コンクリート工学協会」時代の出版物であれば，当時の名称を使う．
* 「さび」，「防錆」，「発錆」とし，「防せい」や「発せい」は用いない．
* 「充塡」とし，「充填」や「充てん」は用いない．
* 「じん性」，「ぜい性」とし，「靱性」，「脆性」は用いない．
* 動詞では，「組み合わせる，繰り返す，練り混ぜる」などとし，「組合せる，組み合せる，繰返す，練混ぜる」などは用いない．
* 名詞では，「組合せ，繰返し，練混ぜ」とし，「組み合わせ，組み合せ，繰り返し，練り混ぜ」などは用いない．ただし，例外的に，「試練り」ではなく「試し練り」とする．
* 「行う」や「伴う」とし，「行なう」や「伴なう」としない．
* 「この示方書，この章，この編，この節」などとし，「本示方書，本章，本編，本節」は用いない．また，指示対象が適切になっているか，多用していないかを常に確認すること．
* 文末表現は，基本原則編に記載された解説 表1.4.1を基本とする．特に，枠囲みの条文は表の文末表現の標準のいずれかを用いることを原則とする．解説では，基本的に条文との重複を避けるとともに，条文よりも強い表現は避ける．たとえば，解説文の「・・・を選定する」は，「・・・を選定するのがよい」などと変更するべきところもある．